

星の停留場 (29) かみのけ座

土山 紀子

青々赤々美しい季節の到来です。けれども対照的に、空の方は曇んで星もぼんやりしていますね。心なしか星の数さえ少なく見えます。

それもそのはずで、春、私たちは星が少ない銀河系の北極方面を見上げているのです。星は銀河系の銀河面に沿って多く存在していますから、銀河面を向いている夏冬は比較的にぎやかな星空に、銀極を向いている春秋は寂しい星空になっています。

今回は、銀河系の北極を抱くかみのけ座を巡ってみましょう。

かみのけ座は、しし座・おとめ座・うしかい座・りょうけん座・おおぐま座に囲まれた微かな星の群れで、1602年、デンマークの天文学者ティコ・ブラーエによって正式に星座として判定されました。

非常に正確な天体観測を肉眼のみで行った最後の天文学者、ティコ・ブラーエ。彼が判定したとされる星座は、全天88星座の中でかみのけ座だけです。ティコが天動説を立証するために行った素晴らしい観測データは、助手のケプラーによって地動説立証に活用されるという皮肉な結果となってしまいました。時代から知られた美しいかみのけ座に、確たる地位を与えた功績は、今日も忘れさせることなく輝いています。ティコはデンマークとスウェーデンの間の海峡に位置するベン島で長年観測を行っており、ここには今も、復元されたティコの天文台と空を見上げるティコの銅像を見ることができます。

このように、かみのけ座はトレミー48星座に含まれず、故にティコの時代まで正式な星座として認識されていませんでしたが、起源は早く、紀元前3世紀のギリシアの博学者エラトステネスによって、“アリアドネの髪”とか“エジプトのベレニケ女王の髪”などと記されています。その後も、オランダの地球製作者メルカトルが1551年に制作した天球儀ほか、いくつもの文献によって存在を示され、知られていました。

かみのけ座には星座に相応しい美しい伝説が伝わっていますが、これが一風変わっています。神話ではなく、実に基づいた実在の人物が主役なのです。

舞臺になるのは紀元前3世紀のエジプト。当時エジプトを治めていたマケドニア王朝の王プトレマイオス3世の妻ベレニケは、美しい琥珀色の髪の持ち主で、その髪的美しさは近隣諸国にまで響き渡るほどでした。

物語はエジプトとアッシリアの戦いの時です。プトレマイオス3世が軍を率いて出陣すると、ベレニケは夫を心配するあまり、愛と美の女神アフロディーテの神殿へ行き、夫が無事に戻ったら髪を捧げると誓いを立てて祈りました。プトレマイオス3世が凱旋すると、ベレニケは誓い通りその美しい髪を切り落とし神殿に捧げましたが、翌朝、髪は神殿から消えてしまいます。王は大変怒り、神官らをその場で処刑しようとした。しかし、そこへ宮廷天文学者コノンが現れ、かみのけ座の星々（一説ではこのとき現れた彗星）を指して言います。「ご覧下さい！ 王妃の髪は一つの神殿に置いておくにはあまりに美しすぎるので、世々々の人々に愛でられるよう、神々によってあそこへ置かれたのです」

王はこの説明にたいそう満足し、ベレニケは彼女の心がアフロディーテに届いたことを知って喜んでということでした。

ベレニケは、プトレマイオス3世の死後ベレニケ2世として即位し王位争いの最中に暗殺されましたが、彼女の美しい姿は、今もプトレマイオス3世の治世に作られた8ドラクマ金貨と10ドラクマ金貨の叫に彫ることができます。また、彼女のために名づけられた古代都市ベレニケは、今もリビアの港町ベンガジとして残っています。

別の伝説では、12年間続いた長皿をキリストによって壊されたエルサレムの女（新約聖書ノマルコ5-25・マタイ9-20・ルカ8-43）ペロニカが、かみのけ坐と結びつけられることもあります。これは、ベレニケの名をラテン語化すると“ペロニカ”になることから生じた混同のようです。

かみのけ坐は、このほか、しし坐の一部として獅子の尾の先端にある毛の房に彫立てられたり、おとめ坐の一部として乙女が持つ麦の束、あるいは浴着棒として彫られたりしてきました。バイエルはこの坐坐のことを“バラの花環”と呼びましたし、“アイビーのリース”“象牙の花輪”などという呼び名も残っています。

また、バビロンの都を舞台にしたピュラモスとティスベの悲恋物語から、バビロニアでは獅子（しし坐）の近くに落ちているベールにも彫られていました。

結婚が許されなかったピュラモスとティスベは駆け落ちを決意し、桑の木の下で落ち合う約束をしますが、先に来たティスベの前に突然ライオンが現れ、彼女はベールを捨てて逃れます。ライオンは獲物を貪るばかりの皿だらけの目でベールを引き裂き立ち去りますが、そこへ来たピュラモスは、皿まみれのベールを彫て恋人が貪り殺されたと勘違いし、自ら命を絶ってしまいます。戻って来たティスベもピュラモスの命を奪った後を追い、以来、桑の木は辛い恋人たちの死を悼むように暗赤色の実をつけるようになり、ティスベのベールも坐坐になって獅子の近くに輝いているのだということです。

かみのけ坐で所有名を持つ星はα星（4.3等）のディアデムだけ。王冠やヘアバンドを意味するラテン語 diadema が語源と考えられ、近世になってつけられた名前です。

